

2021 年度大学入学式 式辞

学長 湯口 隆司

ご入学おめでとうございます。ご入学を教職員一同心から歓迎をいたします。

多くの方が高校最後の一年間をそれまでの高校生とは異なる高校生活をされ、入学されたと思います。大学入学共通テストの第一期生でもありますし、何よりコロナ禍によりこれまでどの世代も経験しない環境の中での高校最後の年、そして大学入試となりました。外出の自粛や部活動の制限などが長引くにつれて、疲労と苦痛が蓄積された一年間であったと思います。3密を避けるため友人関係や家庭内でのめごとが増えた人もいるかもしれません。保護者や来賓の方々には入学式への参列をお断りいたしました。皆さんの周囲には観光業に関わる保護者の方もたくさんいることを思うと複雑な気持ちになるのは私だけではないでしょう。

これからの大学生活は学生アルバイトの減少など、これまでの学生と比べ、平たんな大学生活にはならないでしょう。是非、大学での学びの目標をしっかりと持ち毎日を実行に過ごしていただきたいと願います。大学も教職員一同、皆さんと共に励まし合い有意義な学生生活を送れるよう努めたいとおもいます。

さて活水女子大学は基督教の『聖書』の言葉を校名に、また建学の精神として掲げ、基督教による人格教育を目指す大学です。活水とは文字通りには活ける水、すなわち神様、そしてそれと同格である愛、真実、正義などと同じものです。みなさんが入学して、キリスト教学でしっかりこれらのことは学んでいただきたいと思います。

活水学院は米国の女性宣教師エリザベス・ラッセル先生により 1879 年に創立された学校です。彼女は南北戦争で激戦地となった東部の出身です。現在の米国でアジア系住民へのヘイトクライムが連日報道されていますが 1860 年末に完成した北米横断鉄道には大変多くの中国人労働者が祖国から連れてこられ約 2 万人の中国人出稼ぎ労働者は完成してしまえばお祓い箱となり、次に日本からの移民も差別や隔離政策が続きました。19 世紀から 20 世紀の上半期は今以上に米国内でのアジア系に対する偏見が社会に充満していたのです。

創設者のエリザベス・ラッセル、ギールの両宣教師は、このような社会で育ちました。アジアの小国である日本に宣教師として派遣されたことを見ると、米国社会の多様性にも気づかされます。活水の土台は『聖書』にあると申しましたが、創設者の活水の教育ビジョンは、混迷深まる今日、これから活水女子大学で学ばれる皆さんに大きな希望を与える私だと思います。

その一つは「確信」です。それは自分の力に頼る「確信」ではなくキリストにつらなることにより生まれる力強い「確信」です。民族や文化を超えた「確信」、これがなければアジアの小国だった日本には来なかったでしょう。また「確信」とは神さまが備え、導く道、

進路への厚い信頼です。

ラッセル先生は自分が選んで長崎に来たわけではありません。神様からの指し示しとして、その確信に立ち、神さまに来させられたのです。一米国人女性が異国で学校を始める、それを実現したのは神さまの計画への信頼とそれへの「確信」でした。私は本日入学された皆さんにはラッセル宣教師と同様の確信をもって、神さまの介在があったと考えて頂きたいと願います。

さらにその生涯を見ると「誠実」と「責任」という言葉が浮かびます。誠実な祈りを教育者の中心課題とし、また学校の管理者としての「責任」の自覚、使命感を持ち教育の最前線にたちました。

写真を見ると威厳のある風貌ですが、決して苦い顔をして教育に当たったのではないでしょう。「喜び」の存在です。「喜び」の中でラッセル先生は教育の業に励ましました。教育を通して、日本の女性が自立した人生を送られるように、技能と知識を習得し、社会人となる、広い視野を持った職業人となることは活水の教育目的です。巣立つ若い生徒や学生の姿をみることは教育者の大きな「喜び」であったはずです。また女性への差別や社会的偏見、キリスト教教育への弾圧に耐え、信仰の自由に立った教育に尽力したその背景には彼女の「粘り強さ」がありました。

最後に創設者の生涯を通して示される姿は「時代の先進性」と「連携」です。教育のカリキュラムの先進性だけでなく、社会福祉施設を作り、困窮家庭の女性の自立を促進しました。この創設者によって建てられた女子教育の歴史ある大学に皆さんは入学されました。

これからの生活での困難は創設者と同様の未知の挑戦や課題となるかもしれません。2021年度の学院聖句はそのような先の見えない将来に希望の光を与える神さまの約束の言葉として選びました。

コリントⅡ12:9 「すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」

神への祈りは自分自身の限界、弱さのなかで捧げられます。その祈りの返答は一人ひとりに返されます。皆さんはすでに東日本大震災やコロナ禍での社会のもろさの中で育ってきました。これからはSDGsや環境、人権など本学院だけでなく日本そして世界中に共通する課題であり問題ですが、新鮮な思考と発想で挑戦をしていただきたいと願います。

聖書は苦しみや悲しみ、飢えや貧困、内部の不和や分裂の危機などを通して、神様が訓練すると記しています。それは、私たち一人ひとりを神は愛しているがゆえに訓練し、鍛えるのです。

各自が祈りのなかで積極的に想像的な生き方、神さまに導かれた正しい生き方、目標を定めた生き方が、皆さんの祈りの返答として与えられるようにと願います。神様に頼りつつ確信と責任を自覚し誠実にそして粘り強く目標に向かう毎日となることを祈ります。以上で学長の式辞といたします。